

ヨウガツ 二十日正月。

コシゲンカイジュツ 弧矢技解術 安永十年宮井安泰の著。關孝和の括弧算法に基づいて、弧矢技の關係即ち圓理の一端を述べたものである。

コシコクダカ 越石高 ↓コシダカ 越高。

コシサカ 越坂 ↓オツサカ 越坂。

コシダカ 越高 藩政時代に、田地にして元來甲村の高であつたものが、乙村の高に轉じたものをいうた。能美郡小山田村三百七十石の内九十石餘は大聖寺藩領に越高となり、又鹿島郡町屋村から蒲仁村にも越高があつた。越高は又越石高ともいひ、普通の飛地とその性質を異にする。

コシチカガミ 越路加賀見 一冊。又越路鏡とも題する。加賀藩に於いて大槻朝元が權力を振うた頃から、寶曆の銀鈔發行の頃までのことを書き、この難局に當つて巧みに藩政を處理し得たのは前田土佐守の功績であるとした小説風のもので、土佐守は直躬であるのを清恒と號名を用ひてある。漢文の序に、寶曆丙子天沙彌雲水、跋に于時寶曆十一春武江小子并好當秀伯とある。

コシチノ 越路野 羽咋郡田知瀨の北方なる野をいふ。能登名跡志に、中納言家持の歌として、『越路野をさし出れば田知瀨氣高く見ゆる浦津瀬の里』と載せて居るが、固より誤であらう。

ゴジツキン 御昵近 ↓オメミエイジャウ 御月見以上。

コシツシユンサク 虎室春策 石川郡曹洞宗大乘寺十四代の住持。初め淨住寺に住み、後大乘寺を置した。文祿二年二月廿日寂。

コシノイヌ 越の犬 中型日本犬の一つで、加賀能登・越中・越前等に播布し、肩幅四〇糎から六〇糎、体重一一疋餘から二六疋、耳は尖端稍圓味を帯びて立ち、物は長くして尖り、四肢強健にして飛筋能く發達し、跳躍疾走力に富み、毛は粗くして軟毛が多い。尾は巻くもの少くして横に向き、背は眞直で腹は凹状をなす。もと地犬と稱し、狸・穴熊・鹿・雉その他鳥獸の狩獵に用ひ、又は番犬とし飼育せられたもの。近時漸く撲殺せられて殆どその跡を絶つに至つたので、昭和九年十二月天然紀念物として指定せられた。

コシノオホヤマ 越の大山 萬葉十二『み雪降る越の大山行き過ぎて何れの日にか吾が里を見む』この越の大山を白山と見る説が多い。八雲御抄にも、『白山、こしのおほ山ともいふ。』と註し、歌枕名寄には、『越 大山加賀國』とある。それは白山を雪の絶えぬ山として、『み雪降る越の大山』をその意味に解するのであるが、北陸萬葉集古蹟研究では、『み雪降るは越の枕詞で、越の大山に雪の積つた様を目前に眺めたのではない。行き過ぎて、越の大山を越えたことであるから、街道から遙に距つた白山をこれに當てるのは無理である。寧ろこの大山は越前の愛媛山ではなからうかと云うてゐる。又藻鹽草に越の大山を越前或は越中とするのは、和名抄に越前國大野郡大山・越中國婦負郡大山の郷名があるからだといはれ、一説に立山の別名かといふのは何等の證據がない。

コシノサスケ 越野左助 ↓キンバク 金箔。

コシノシラナミ 越の白波 堀麥水の著。

現存のものは首巻と記されて、威盜熊坂長範・妖盜四井次郎兵衛・奇盜矢島伊助・竊盜白銀屋興左衛門の傳が記されて居る。この以外の續編が果して成つたのか否かは明らかでないが、恐らくは未完成の書らしい。

コシノシラネ 越の白峰 白山のことを越の白峰といふ。源平盛衰記卷廿八に、『越前國越の白峰に連りたり』と見え、歌枕名寄には越、白嶺と記し、類字名所集・勅撰名所集には、『越、白根、加賀石川郡』とある。白峰も白嶺も、訓んで白根に同じい。

コシノシラヤマ 越乃白山 和漢三才圖會卷五十六白山の條下に『白山四時有雪。故呼曰越乃白山。』又曰『加賀白山』とあつて、越の白山は越路の白山の意であらうが、加賀建國以前に在つては越前の白山と見てもいい。加賀建國以後に至り、加賀の城内に屬したが、その加賀たるや元來古越の一部であるから、この意味に於いて矢張り越の白山である。但し明倫の新撰樂記に越前、白山など、ある類は誤で、都人士は加賀建國以後も之を越前であると思つて居たのであらう。

コシノタカネ 越の高根 白山の一名を越の高根ともいふ。千載集冬の歌に『京極前太政大臣の高陽院の家の歌合に雪の歌としてよめる、治部卿通俊。おしなべて山の白雪積れどもしるきは越の高根なりけり。』又藻鹽草には『こしのたかね、加賀歌枕名寄には『越、高嶺』ともある。

コシノネワタシ 越の根渡 和歌分類に『越乃根渡は、越路の高根より吹渡す山風也。』とある。越路の高根が、越の高根と同じく白山

の別稱であるとせば、越の根渡は白山風の一各であると解釋し得られる。夫木抄卷十八に、『元永元年十月内大臣家、歌合、初雪、藤原家國。夜を寒み越の根わたしさえくてももふもしるし今朝の初雪。』の歌がある。

コシノヤマ 越の尾山 白山の山尾をいふので、藻鹽草・夫木抄等に越中と註するのは非であらう。圓融天皇の御世の安法法師集に、『神無月ばかりに飛驒へいきけるに、越の山を見るにも道のなかりければ、彼是してよめる。越のをの山も紅葉のまだしきにはかよりしぐれくるまなりけり。』夫木集に『堀河院の百首修理大夫顯季作歌。峰高き越のを山に在る人は柴車にてかへるなりけり。』とある。

コシバ 小柴 鹿島郡の舊村名。應永三年三月廿九日沙彌在判、得田勘解由左衛門入道宛所の文書に、『高畠庄内小柴村一分地頭職惣領分事、任今月廿九日肥前入道狀之旨渡申候也。』とある。小柴村は今廢して明らかでないが、コクヌギと訓んだのなるべく、貞治四年三月四日附尼しゆ一が鳳至郡總持寺塔頭法光院への寄進狀に、『のとのくにたかたけこへぬきむら』とあるものは、こくぬぎの誤寫かと思はれる。此木をクノギ(クヌギの訛)と讀むことは鳳至郡の邑名にもある。

コシバシヨウヨウ 小柴從容 金澤の俳人、吳雪庵と稱した。もと越中氷見の産で、藩の足輕であつたもの。明治二十二年歿。

コシボソ 腰細 鳳至郡仁岸郷に屬する部落。

コシホツジ 小躰辻 江沼郡北濱に屬する部落。